

特集 比較研究の地平

シンポジウム」第六七回研究例会「口承文芸モチーフの分布と伝播」

環太平洋の神話

— 分布・伝播研究のために —

山田 仁史

はじめに

本稿では、いちおう「環太平洋」(Circumpacific)を中心に、広義の神話(伝説・昔話なども含む口承文芸全般)の分布・伝播研究についてこれまで考えてきたこと、今後のために考えていることを述べたい。

一 環太平洋という地域

一九九六年六月一日に国学院大学たまプラーザキャンパス横浜)で開かれた日本口承文芸学会二〇周年記念大会において、大林太良(一九二九—二〇〇一)は「人類文化史上における口承文芸」と題する講演を行なった。これは本誌『口承文芸研究』二〇号(一九九七年)に掲載され、のち「口承文芸の起源と発達」と改題の上、その著『仮面と神話』に収録された「大林一九九八」。

ここで大林は、世界における「東西の伝統の並立」について、二つの典拠をもとに論じた。その第一は、ステイス・トンブソン(一八八六—一九七六)の『民間説話』第二部が「アイルランドからインドまでの民間説話」[Thompson 1946: 11-293, 邦訳: 二七—二六五]と題され、「この範囲が、一つの地域をつくっていること、そしてここがまさに世界でも昔話が最も華麗な花を咲かせた地域であること」。

そして第二に、レオ・フロベニウス(一八七三—一九三八)が最晩年の論文「民間伝承学のための資料」[Frobenius 1938]において論じたように、「インドから西の世界に対して太平洋をめぐる地域には、西にはない共通の話型やモチーフで独自の伝統があったこと」、である。この、「東地域と西地域」という神話・昔話のモチーフ・形式における二大群については、大著『銀河の道 虹の架け橋』でも繰り返し、強調されている。そこではフロベニウスが挙げた以外にも、「太陽を射る話」など東群の存在を語る例はいろいろあり、「大勢として東西両群の存在は疑うことができない」と述べた「大林一九九二・四」。

なお私は一九九七年、「太陽の射手——日本・台湾と周囲諸民族における「太陽を射る話」の比較研究」と題する修士論文を京都大学大学院人間・環境学研究科に提出、受理され「山田一九九七」、その成果の一端を一九九七年六月八日に日本口承文芸学会第二二回大会で口頭発表後、「太陽を射たモグラ——比較の視点から」と題し、『口承文芸研究』二二号に掲載していただ

いた「山田一九九八」。

さて、この東西両群というのを私（山田）なりに言い換えるなら、東群というのがほぼ環太平洋に相当する。西群は、おおよそ「インド・ヨーロッパ語族+（ユーラシア・アフリカ大陸の）イスラーム圏」に当たると思われる。

しかし大林が付言したように、「両群にまたがって広く分布するモチーフもある」[大林一九九九：二二二―二二四]。たとえば「王様の耳は驢馬の耳」の話、あるいはシンデレラの類話などがそうした例として挙げられよう[山田二〇一〇：二〇一―二〇一三b]。

「環太平洋」の語は、以上のような背景を念頭に置いた上で、用いているものである。

二 資料そのものの問題

大林はまた、関敬吾ほか編『日本昔話大成』第二巻「研究篇」（一九七九）に「説話の比較研究の方法」と題する論文を寄せ、これはその後『日本昔話研究集成』第一巻「昔話研究の課題」に再録された[大林一九八五]。

本論文で大林は、「説話の系統論ないし文化史的位置づけを目的とする比較研究」に限定した上で、「資料と地域」「資料の整理」「文化史的解釈」をめぐる諸問題を論じた。要約するとともに、示唆的な部分を抜粋してみよう。

大林によれば、存在する資料の質と量、研究地域の限定の仕方、がまず問題となる。「地域が狭ければ、それだけ資料も

細かく集めることができ、かつきめの細かい分析も可能となるが、……そうかといって地域を拡大すれば、目が粗くなる危険がある。この矛盾から脱れ出る方法の一つは、今まで他の学者によって試みられた資料の集成を利用することである」[大林一九八五：八八]。

次に資料の整理については、分類方法の問題が扱われている。

そして文化史的解釈の仕方については、次の三点が挙げられた。

(一) 分布状態。すなわち地理的な条件、交通の可能性、一般的な文化影響の方向などの知識が有効な助けとなる。

(二) その話のなかに反映している文化要素を手がかりとして考える。

(三) 問題の説話形式の分布を他の文化要素の分布と比較する。

これらは、現在でも十分に実行しうる方法論である。以下ではこうした指摘にも基づきつつ、私自身のこれまでの研究における経験などをもとに、論を進めたい。

まず、資料そのものの問題から考えてみよう。

非常に博識だった米国の民俗学者・人類学者アラン・ダンデス（一九三四―二〇〇五）が編纂した『国際民俗学』[Dundes ed. 1999]は、口承文芸研究の古典的論文を集成し、詳細な解説と書誌を附した貴重な書物である。この中に、ロシアの民俗学者で、双子の兄弟だったボリス・ソコロフ（一八八九―一九三〇）とユーリー・ソコロフ（一八八九―一九四二）[堀二〇一〇：二六、四三参照]による資料収集の苦悩を吐露し

た文章が収められしる⁽²⁾ [Sokolov 1915]。

ここでソコロフ兄弟は、一九〇八・〇九年に首都モスクワから歌謡採集のため地方へ赴いた二人が、どれほどの困難に遭遇したかを生々しく描写している。それは第一に、田舎の歌など唄って、都会から来た紳士に馬鹿にされるのではないか、という羞恥心。そして第二に、自分たちの歌謡を本にして一儲けしようとしているのではないか、という猜疑心、であった。さらには日露戦争の記憶がまだ鮮明な時期でもあり、二人は地図を携帯して調査していたため、日本人のため働いているスパイと疑われることもあった。

これらの困難は、実際にフィールドワークを行なった人であれば、経験済みではなからうか。実際、私も台湾原住民のもとで後者の困難を経た、つまり「それで金もうけするつもりなのか」と言われた経験がある。

前者についても各地から同様の報告がある。たとえば一七世紀前半のカナダでは、イエズス会宣教師たちが盛んに布教を行うかたわら、現地人たちの生活習慣や宗教観念、口頭伝承などを記録していた。しかし、現地人たちは宣教師に軽蔑されるのではという恐れから、多くを口にしなかった可能性が指摘される⁽³⁾ [Clements 1996: 62]。

こうした採集にまつわる困難（記録における精確さ、原語表記の有無、翻訳の問題なども含め）がまず、資料の質・量を根底で規定する要因として挙げられよう。

資料そのものの質・量、精・粗といった問題は、分布や伝播の比較研究にあたっては、コントロールしにくい面が否めない。しかし、心に留めておくべきことである。一例として、「王様の耳は驢馬の耳」についての最も包括的な研究は、クロアチアの民俗学者マヤ・ボシユコヴィチ・ストゥツリ（一九二二—二〇一一）著『支配者の秘密に関する民間伝説』[Bošković-Stulli 1967]である。そこには主としてユーラシア大陸から二九一の類話が集成されているが、そのうち一四七話と最も多いのはクロアチア・セルビアの類話である。これは、著者自身がフィールドワークで再録したものが含まれているためだ。次に突出しているアイルランド（四〇話）は、彼女がダブリンのアーカイブを利用できたことに加え、アイルランドでの口承文芸採集活動が他国と比較して非常に盛んだったこと [Dundes ed. 1999: 153-157] もあるだろう [山田二〇一三b: 一四八—一四九]。

さて資料そのものの問題はこれくらいにして、次に「類似的神話」の比較の問題に進みたい。

三 「類似的神話」の比較

「類似的神話」というのは（私自身にとっても）馴染みのない語だが、「似たような内容をもつ神話」としておく [山田二〇一四]。

類似的神話の存在をどう説明するか、について若干補足したい。言語学者プラストの論文「狐の嫁入り」に、文化要素の

【表】文化要素分布の型と、それぞれに対する説明の仕方

[Blust 1999: 491]

型	言語的連関	連続的分布	自然な分布	説明
1	+	+	+	C, A/B
2	-	+	+	A/B
3	+	+	-	B/C
4	-	+	-	B
5	+	-	+	A/C
6	-	-	+	A
7	+	-	-	C
8	-	-	-	存在せず

分布に関する説明原理がまとめられている【表】[Blust 1999: 491]。それによれば、説明の仕方は次の三種類に分けられる。

A 帰一（輻輳）、あるいは独立発明。この説明原理は、そうした分布の生ずる可能性が限定されているか、あるいは「人類の心的

同一性」による、というものである。

B 伝播。これは歴史的接触を通じての、借用によるもの。

C 共通の遺産。すなわち共通の文化的祖先から継承されたものである。そして表に見える

ように、もしある要素が、言語的に連関ある人々の間で（+言語的連関）、連続的に分布しており（+連続的分布）、世界の他地域にも現れているなら（+自然な分布）、追加情報がない限り、A・B・Cのすべてが、この分布を説明しうる。もしその要素が同源語形と結び付いており、その関連語彙を再構しうるなら、Cに有利である。そしてブラストは、オーストロネシア語族については、祖語の時点では、

*kqanw 「首狩に行く」という語が再構しうるから、この慣習は「共通の遺産」という原理で説明されるだろう、という結論に達している [Baldick 2013も参照]。

こうしたブラストの表もある種のチェックリストとして役立つが、もつとモチーフないし伝承を限定した形でのチェックリストも存在する。

たとえば、かつて北アジアは洪水神話の空白地帯と言われることもあったが、この研究状況を変えたのはアンデルソンである。ドイツ系エストニア人を父に持ち、タルトウ（ドルパット）、ケーニヒスベルク、キールなどで活躍した民俗学者ヴァルター・アンデルソン（一八八五—一九六二）は、この地域から知られる二一の洪水伝承を集成した [Anderson 1923]。その際に彼は、オーストリアのインド学者・民族学者でマックス・ミュラーの弟子であったヴェインテルニッツ（一八六三—一九三七）[Winemitz 1901] に従い、聖書のノアの洪水伝承からの影響の有無を確かめた。すなわち彼は、聖書のノアの洪水伝承にみられる九つの要素を、「非常に特徴的な」五要素と、「特徴的な」四要素に分け、それらの有無により、聖書からの影響度をはかったのである。それらは、

非常に特徴的な要素

A 閉じることのできる方舟、B 「生の種」の同伴、C 鳥などを放つこと、D 供物、E 虹

特徴的な要素

F 倫理的動機、G 英雄の救出、H 予言、I 人類の世代の更新であった〔山田二〇一〇a・一六九―一七二〕。なおまた、日本の潜伏キリシタンの終末論神話における洪水のように、聖書の伝承と東アジアの「石像の血」説話が混淆したと見られるものもある〔山田二〇〇七・五一―五二〕。

チエックリストではないが、通常は「四」を「聖教」とするネイティヴ・アメリカンにおいて〔Dundes ed. 1999: 97 参照〕呪的／障害物逃走譚 (magic/obstacle flight) においては「三」が用いられることなども、伝播の可能性を示唆する一つの指標となりうるだろう〔大林一九九〇・九二―九三〕。

分布・伝播の研究とはつまり、比較研究である。そのことは、その比較が何を目的とするかによって、方法や対象が異なってくることを意味する〔山田二〇一四〕。

環太平洋における口承文芸の分布と伝播について言えば、かつて私は、ベーリング・ルートとポリネシア・ルートという二つを設定したことがある〔山田二〇一二・一一―一五〕。改めて強調するなら、前者はアフリカを発した現生人類が初めて新大陸に足を踏み入れたルートであり、当時の人類は狩猟採集民だった。しかし、このルートによる文化要素の伝播は、幾度にもわたり、双方向に行われたに違いない。そしてポアズが指摘したように、その際、伝播の中心となった地域の存在も考慮せねばならぬだろう〔Boas 1940: 425-426, 邦訳: 二二〇―二二一、

Mader 2008: 60-61 参照〕。

一方、ポリネシア・ルートをとったと見られる神話は多くないが、前に挙げなかったもので、ナイアガラ滝の起源伝説を初めとするベルセウス型の伝承も、そうした一つかもしれない〔山田二〇一〇b〕。

四 伝播に関する諸問題

言うまでもなく、伝播は口承文芸にかかわらず、さまざまな文化要素についてありうるし、実際に起きてきた現象である〔山田二〇〇九a〕。ただ口承文芸については、書承によって比較的新しい時代に伝わった可能性や、最近のメディアによって伝わった可能性も出てきている。

たとえば台湾アミ族の「太陽を射る話」は戦前の記録には見えず、一九九四年に刊行された観光局の昔話集に突然現れる。これは戦後になってこの地に知られるようになった伝承であろう〔山田一九九七・三八五―三八八〕。反対に「因幡の素兎」の話は、戦前の教科書によって朝鮮半島に伝わった可能性が指摘されている〔大林一九八〇〕。

この関連で――もちろん竹など植物からの誕生譚は華南に古くからあったとしても――一九二〇年代に中国で紹介され、「斑竹姑娘」に翻案されたと見られる竹取物語も、採り上げることができよう〔年表〕〔宋二〇〇四〕。

〔年表〕『竹取物語』・『斑竹姑娘』論 関連年表 (山田作成)

〔A〕日本古典『竹取物語』の成立

9世紀後半～10世紀初め 『竹取物語』成立

—◇—◇—◇—

〔B〕近代中国における日本文学の翻案・紹介

1922 中国最初の児童文学専門週刊誌『児童世界』に、鄭振鐸による『竹取物語』の「訳述」である「竹公主」掲載。鄭は前年、周作人（魯迅の弟）・沈雁氷・謝六逸とともに「文学研究会」を発足し、日本文学の翻訳・紹介を行っていた。この「竹公主」では、原話の5人の求婚者のうち最後の2人の順序が入れ替わっている。

1925 「竹公主」が「文学研究会叢書」の1冊『天鵝』に収められ、商務印書館から出版される。同書は1939年再版。「竹公主」本文の終わりには「日本の神仙故事、鄭振鐸譯述」と示されている。

1927 『竹公主』が「児童世界叢刊」の1冊として出版される。

—◇—◇—◇—

〔C〕田海燕による『金玉鳳凰』の記録・出版

1954 春、長江航運部門に勤務していた田海燕が、西藏（チベット）族代表団を航路送る途中、チベット族の多くの伝承を聞き、書き留める。

1957 田海燕、聞きした伝承の一つをまとめ『金玉鳳凰』として上海の少年児童出版社から刊行。1961年に同題で改編・再刊。この中に「斑竹姑娘」が含まれる。

—◇—◇—◇—

〔D〕『金玉鳳凰』所載『斑竹姑娘』の発見、『竹取物語』の原型としての紹介

1970 百田弥栄子、慶應義塾大学に卒業論文『竹取物語の成立に関する一考察』を提出。指導教員は君島久子と伊藤清司。この論文で初めて『竹取物語』と「斑竹姑娘」の酷似が指摘される。

(1972 9月、日本、台湾〔中華民国〕と断交し中華人民共和国と共同声明。10月、パンダ二頭〔カンガシラン康康と蘭蘭〕が贈られ上野に来る。)

1972 3月、君島「チベットの『竹娘説話』と『竹取物語』」（『説話文学研究』6号）発表。11月、百田「竹取物語の成立に関する一考察」（『アジア・アフリカ語学院紀要』3号）発表。

1973 2月、伊藤清司『かぐや姫の誕生』（講談社現代新書）刊行。

1977 君島、1961年版『金玉鳳凰』の邦訳『チベットのものいう鳥』を出版。

1979 野口元大校注の『竹取物語』（新潮日本古典集成）に、「斑竹姑娘」の中国語原文と百田による日本語訳「竹姫」、および両者の比較表が収録される。「近年最大の発見として話題を呼んだ『斑竹姑娘』（竹姫）、その「発見者百田弥栄子」と紹介（p.5）。

—◇—◇—◇—

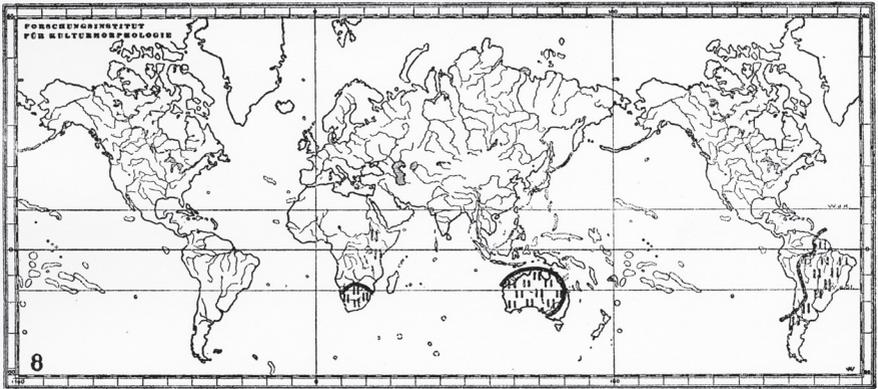
〔E〕論争の終熄と余燼

2004 6月、百田『中国神話の構造』を出版。「私のライフ・ワーク」として改めて『竹取物語』と「斑竹姑娘」の関係について詳論。彝族の「竹息子」、土家族の「斑竹姑娘」、藏族の新資料「斑竹姑娘」などを紹介。

9月、京都大学大学院文学研究科・修士課程在籍中の宋成徳「『竹取物語』、『竹公主』から『斑竹姑娘』へ」（『京都大学国文学論叢』12号）を発表。「斑竹姑娘」は、『竹取物語』の鄭振鐸による翻案「竹公主」を田海燕が見た上で、再創作したものと論ずる。これで論争に終止符が打たれた感がある。

こうした口承・書承による「越境」と、その弊害となりうる文化の相違や激しい敵意、土着化の問題などについては、日本口承文芸学会が編集した「シリーズことばの世界」第一巻『つたえる』に最晩年の伊藤清司（一九二四—二〇〇七）が寄せた「越境する口承文芸」〔伊藤二〇〇八〕にくわしい。

分布から伝播を読み取るにあたっては、以上さまざまに問題はあるが、現生人類の出アフリカ時点で存在したと考えられるモチーフも、いくつか存在する。たとえば日月を双子兄弟とみる観念【図一】〔Frobenius 1923: 59, Yamada 2015 参照〕、金星が月の妻というモチーフや、太陽と月の



Das Geschlecht der Gestirne in der fossilen Kultur: Mond ♂; Sonne ♀ = Zwillingbrüder.

図1 太陽と月は双子兄弟とする観念の分布〔Frobenius 1923: 59〕

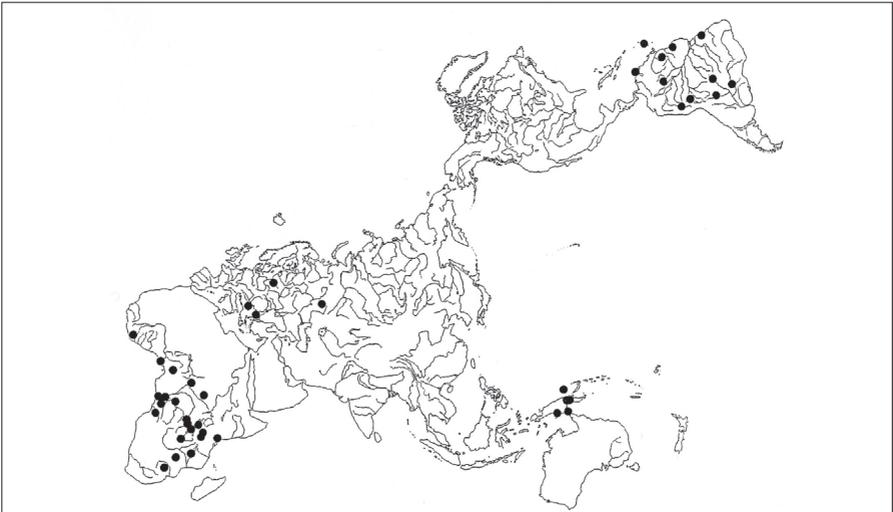


図2 金星が月の妻というモチーフの分布〔Berezkin 2007: 13〕

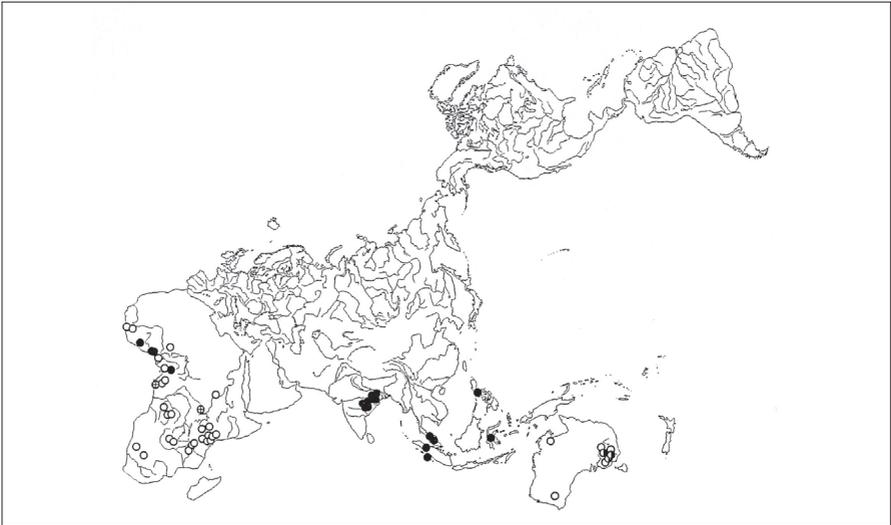


図3 〈騙されて子らを食う〉モチーフの分布 [Berezkin 2007: 7]

- : ある人がもう一人に、それぞれの子ら(母またはキョウダイ)を食おう(殺そう)と提案する; 提案者は自分の身内を隠すが、他方は実際に殺す。一方の人および/または生き残った子供が太陽である。
- : ある動物が別の動物に、子供(母)を食おうと提案し、自分のを隠す。
- ⊕ : 太陽の仲間は星の仲間(星々)と同じくらい多かったが、月により死んだ(詳細不明)。

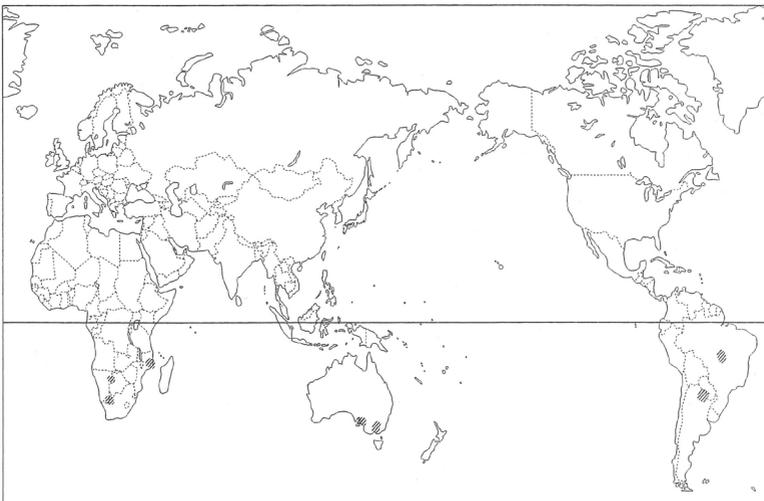


図4 銀河は灰か煙とみる観念の分布 [大林 1999: 613]

喧嘩譚【図二・三】 [Berezkin 2007, 山田二〇〇九b参照]、銀河は灰か煙という観念【図四】 [大林 一九九九：六一三―六一四] などである。

むすびにかえて

本稿、およびそのもとになった口頭発表を準備する過程で、日本口承文芸学会の従来での活動の中で、分布や伝播に関する取り組みはかなりなされてきたことを、改めて知った。これをきっかけに、さらに関心が高まることを期待したい。

比較研究にとって不可欠と思われるのは、国際的な研究協力・交流である。たとえば上述したポシユコヴィチ＝ストウツリにしても、驢馬の耳の類話が朝鮮では『三国遺事』にすでに見られることには、気づいていなかったらしい。研究者同士が国境や言語といった壁を越えて情報を共有し、さまざま議論を交換することが、より実りある比較研究の発展につながるように思われてならない。

注

(1) 『日本昔話研究集成』第一巻の総説において、編者の小松和彦は当時、「研究者組織の充実も注目すべき進展がみられた」と述べ、その例として一九七七年における日本口承文芸学会の、そして一九八二年における説話・伝承学会の設立を挙げている [小松 一九八五：五]。

(2) ボリス・ソコロフとユーリー・ソコロフという二人

のファーストネームは、ユーリー・ペリョースキン氏 (一九四六生れ) と並んで私が親しく接することのできたロシア人研究者、故ボリス・リフチン (一九三二―二〇二二) と重なる。リフチン教授とは二度お会いし、その『中國各民族神話研究外文論著目録 (一九三九―一九九〇)』に対し書評を書いた [山田二〇二二a]。

(3) 伝播論に関連して、私自身の日本神話研究に対する立場については、別に発表した [山田二〇二二c：二七四―二七五]。

引用文献

- ・Anderson, Walter. 1923. *Nordasiatische Flutsagen*. (Acta et Commentationes Universitatis Dorpatensis; B. Humaniora, 4). Dorpat: C. Mattiesen.
- ・Baldick, Julian. 2013. *Ancient Religions of the Austronesian World: From Australasia to Taiwan*. London: I. B. Tauris.
- ・Berezkin, Yuri E. 2007. Out of Africa and Further Along the Coast: African – South Asian – Australian Mythological Parallels. *Cosmos: The Journal of the Traditional Cosmology Society*, 23: 3–28.
- ・Blust, Robert. 1999. The fox's wedding. *Anthropos*, 94: 487–499.
- ・Boas, Franz. 1940. *Race, Language, and Culture*. New York:

- Maamlian. (部分訳はボアズ、フランツ『北米インディアンの神話文化』前野佳彦編・監訳、磯村尚弘／加野泉／坂本麻裕子／菅原裕子／根本峻瑠訳、東京：中央公論新社、二〇一三年)
- ・ Bošković-Stulli, Maja. 1967. *Narodna predaja o vladarevoj tajni*. Zagreb: Institut za Narodnu Umjetnost
- ・ Clements, William M. 1996. *Native American Verbal Art: Texts and Contexts*. Tucson: The University of Arizona Press.
- ・ Dundes, Alan (ed.) 1999. *International Folkloristics: Classic Contributions by the Founders of Folklore*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.
- ・ Frobenius, Leo. 1923. *Vom Kulturreich des Festlandes*. Berlin: Wegweiser-Verlag.
- ・ ——— 1938. *Das Archiv für Folkloristik, Pauduma*, 1: 1-19.
- ・ 伊藤清司 二〇〇八 「越境する口承文芸」日本口承文芸学会(編)『こたえ』(シリーズ)とびの世界第一巻)：五〇—六二、東京：三弥井書店。
- ・ 小松和彦 一九八五 「総説昔話研究の課題」小松和彦(編)『昔話研究の課題』(日本昔話研究集成 一)：二二—二〇、東京：名著出版。
- ・ Mader, Elke. 2008. *Anthropologie der Mythen*. Wien: facultas. wuv.
- ・ 中堀正洋 二〇一〇 『ロシア民衆挽歌——セーヴェルの葬礼』
- き歌』横浜：成文社。
- ・ 大林太良 一九八五 「一九七九」説話の比較研究の方法」小松和彦(編)『昔話研究の課題』(日本昔話研究集成 一)：八六—一〇〇、東京：名著出版。
- ・ ——— 一九八〇 「朝鮮の《因幡の素戔》」『文学』四八：一一三、東京：岩波書店。
- ・ ——— 一九九〇 「一九六一」『日本神話の起源』(徳間文庫) 東京：徳間書店。
- ・ ——— 一九九八 「一九九七」『口承文芸の起源と発達』大林『仮面と神話』：五—二一、東京：小学館。
- ・ ——— 一九九九 『銀河の道 虹の架け橋』東京：小学館。
- ・ 宋成徳 二〇〇四 『竹取物語』、「竹公主」から「斑竹姑娘」へ』『京都大学国文学論叢』二二：七二—七七。
- ・ Sokolov, Boris & Yuri. 1999[1915]. In Search of Folktales and Songs. In: Dundes (ed.) 1999: 73-82.
- ・ Thompson, Stith. 1946. *The Folklore*. New York: Holt, Rinehart and Winston. (トンプソン、ステイス『民間説話——世界の昔話とその分類』荒木博之／石原綏代訳、東京：八坂書房、二〇一三年)
- ・ Winternitz, Moritz. 1901. *Die Flutsagen des Alterthums und der Naturvölker. Mittheilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien*, 31: 305-333.
- ・ 山田仁史 一九九七 『太陽の射手——日本・台湾と周囲諸民族』

- における「太陽を射る話」の比較研究』京都大学大学院人間・環境学研究科修士論文（未刊）。
- ・————一九九八「太陽を射たモグラ——比較の視点から」『口承文芸研究』二二・三三六—四七。
 - ・————二〇〇七「神話から見たヒトの起源と終末」野家啓一（編）『ヒトと人のあいだ』（シリーズ ヒトの科学六）：三五—六二、東京…岩波書店。
 - ・————二〇〇九 a 「伝播主義——古典を学ぶ（二）」日本文化人類学会（編）『文化人類学事典』：七三〇—七三三、東京…丸善。
 - ・————二〇〇九 b 「神話における太陽・月・星の関係」『東 北宗教学』五：三七—六〇。
 - ・————二〇一〇 a 「大洪水（Sinffut）と大火災（Sinbrand）の神話」篠田知和基（編）『火と水の神話——「水中の火」：一五七—一七六、名古屋…楽蔭書院。
 - ・————二〇一〇 b 「ナイアガラの滝の起源伝説」篠田知和基（編）『神話・象徴・言語』三：一四一—一四六、名古屋…楽蔭書院。
 - ・————二〇一一「台湾のシンデレラ？」篠田知和基（編）『愛の神話学』：四五九—四八〇、名古屋…楽蔭書院。
 - ・————二〇一二「環太平洋の日本神話——一三〇年の研究史」丸山顕徳（編）『古事記——環太平洋の日本神話』（アジア遊学一五八）：六一—二四、東京…勉誠出版。
 - ・————二〇一三 a 「書評 李福清『中國各民族神話研究』外 論著目録（二八三九—一九九〇）」『東北アジア研究』一七：一五九—一六三。
 - ・————二〇一三 b 「幽界からの声——〈驢馬の耳〉譚再考」篠田知和基（編）『異界と常世』：一四五—一六〇、千葉…楽蔭書院。
 - ・————二〇一三 c 「オーストロネシアから見た出雲神話」『現代思想』四一（一六）：二七四—二八五。
 - ・————二〇一四「類似的神話」国立民族学博物館（編）『世界民族百科事典』：二〇八—二〇九、東京…丸善出版。
 - ・ Yamada, Hitoshi. 2015. Brother pairs and twin brothers in Japanese and Circumpacific legends and tales: Possible reflection of the hunting-fishing worldview. In: Shinoda, Chiwaki (éd.), *Mythes, Symboles, Rites, II:337-352*. Chiba: Librairie Rakuro. (やまだ・ひとし／東北大学)